
未曾有の教習生

星空の闇に消えた男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未曾有の教習生

【Nコード】

N4865F

【作者名】

星空の闇に消えた男

【あらすじ】

川沿いに広がる自動車教習所に勤めて、はや三十年になる年輩教官・木塚。いつものように、ゆったりと流れゆく川を教習中見ながら、のどかな思いに浸っていたとある日の午後、彼は妙な娘に出くわした。そして、その娘の口から出た言葉が、木塚の脳裏から離れなくなってしまうことに…

午前九時。木塚の一日はここから始まる。

「はい、そこ左に曲がって」

大きな川沿いにある自動車教習所に、彼は教官として勤務している。何より彼は、この朝の清々しい時間帯が好きなのであった。晴れた日には、川に偏に降り注ぐ陽の光が煌めいて映え、教習車から窓を開けると心地良い微風そよかぜが木塚の頬を撫でている。

「そう、カーブは手前でスピードを落としてゆっくりとね：」

また木塚は、自分より断然歳の若い、多くの教習生と触れ合うのも楽しみの一つであった。このゆったりと流れる川沿いの教習所に勤めて、はや三十年の月日が流れた。

（本当に早いよなあ。老いてゆく時間の流れは。この晴れた日の緩やかな川のそれよりもずっと：）

ゆったりと流れていく河川を眺めながら、もう数年で還暦を迎えると思うと、木塚は、ふと若かりし頃の我が身を思い出す。当時まだ毛髪は多分にあり、精魂込めて熱く生徒に指導出来ていた自分。だが、今は違う。多分にあった毛髪もいつの間にか疎らになり、だらし無い生徒に血管を浮き上がらせる事もなくなった。昔は、室内でふざけている教習生に対し、齒に衣着せぬ物言いをしたものだ。だが今では、路上教習で速度オーバーして走る生徒の隣に座っている、

「もう少し、スピード落としたほうがいいぞ」と、補助ブレーキをさりげなく掛けながら、物静かに伝えるようになってきた。年齢としのせいもあるかもしれない。穏やかな物言いのほうが、自分にとっても楽になってきたのであった。風は南から、初夏の爽やかな匂いを伴って教習所にやってくる。そして、木塚の皺寄った頬をも掠めていく。

（おお、若い奴らが駄弁りながら楽しげに闊歩してるなあ）

まだ二十歳過ぎたか過ぎないかくらいの若者を見ると、我が息子の事もふと思ひ出す。（あいつも彼等と同じ年くらいの時、免許取るためにほとんど毎日教習所に通っていたっけなあ：）

そんな長閑のどかな思ひに浸っていたとある日の午後、木塚は妙な生徒に出くわした。蒼白い表情かおして痩せこけた、まだ三十前だというのにあまり若々しくない女であつた。

「：実は私、訳あつて此処に来たんです：」

彼女の話によると、何やら銀行から融資を受けたいが為に、運転免許を取りに来たというのである。父も母も既に他界していないらしい。

「大丈夫なのか。家計のほうは：」

と、木塚は、我が愛娘のように彼女を憂慮した。

「ハ、ハイ……」

彼女は躊躇して頷いただけで、それきり何も話さなかつた。しかし木塚は、腹の中の見えないしこりがどうしても気になるように、この日以来、蒼白い表情でどことなく弱々しい眼付きをしたあの女の事を、自身も懸念してしまうようになった。「あつ、木塚さん。今日“満福”で一杯やりませんか」

夜、同僚の後輩と飲みに行つても、ふとあの娘の洩らした一言が、木塚の脳裏に焼き付いて離れなかつた。

「わたし、お金借りたくて……。でも、そのためには運転免許欲しくて……」

（ううむ……その理由が理解らない。かといって自分が突っ込んで聞く訳にはいかないしな……）

後輩と冗談雑じりの世間話を交わしながら、日本酒で顔を赤く染めながら、木塚は何かその時独り言を呟いた。

（どうしちまつたんだろう、俺は……）

どこか違う世界にすんなり入ってしまったかのような違和感を覚える。あのような生徒に今まで出くわした事がなく、彼にとっては未曾有の一時間だったからである。

明後日の夕方、偶然にもまた、例の山野という娘を教える事になった。彼女は仮免終わって、最近路上に出たばかりである。教習に入る前、木塚は同僚からちょっとした噂話を耳にした。あの娘の家は、青果店を営んでいたらしいとの事であった。

（ひよつとすると、それが関係しているのかもしれないな。まさか、潰れたとかで：）

と、木塚は脳裏で嫌な憶測をした。

山吹色に輝いた黄昏の教習所と木塚の頬に、生温い微風そよかぜが掠めていく。河岸に沿った場内教習場へと続く緩やかな坂道を、徐ろに足を運ばせて教習車へと向かう。三十九号車の中で、山野は既に行儀よく待ち構えていた。蒼白く物悲しげな表情をしていて、初めて合った時と同じく、若々しい魅力がほとんど感じられない。色白の冴えない顔と空ろな眼は、木塚の教官としての気力を吸い取ってしまったのであった。そんな様子をそつと窺いながら車に近寄り、年輩教官はドアを静かに開ける。

「今日も引き続き、安全走行の練習をしましょうか」

謎の娘に対するときまぎする気持ちを抑えるため、木塚はまず一呼吸吐く。それから、いつものように教習簿を見ながらペンを趨らす。車はゆっくりと動き出し坂道を上り、住宅街へ、そして路上へと出ていく。最初の交差点の信号が赤になって停まった時、娘の口から不意に詫びの言葉が洩れた。

「この前は急にすみません。お金借りたくて来たとか、変な事言っちゃって：」

「いや、別に構わないよ。ただ君みたいな情況にいる生徒にさ、今まで出くわした事無かったから、正直驚いたね」 「両親がやっていたお店切り盛りしていくために、銀行まで少し遠いから、車あったら便利だなんて思ってた：」

「そうだったのか。そりゃ大変だな：」

交差点を右に曲がり、陸橋を木塚と娘の運転する教習車は、のろのろと又走ってゆく。

（：別に、：別にいいんだよ。本当に……）

木塚は、何とも言えぬやや気不味い空気から逃げ出そうとするかのように、自然と眼を窓にやる。黄昏の陽が、辺りの家々を黄金色に染めている。そしてまた車はとまり、少し開けた窓からそよ風が木塚と蒼白い表情かおした娘の頬を、涼しげに撫でていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4865f/>

未曾有の教習生

2011年9月26日08時28分発行